

第5回 科学隣接領域研究会（2017.8.28）

科学と倫理 –その2–

「似非科学と社会倫理」

「ロボエシックス（ロボット倫理）人と機械はどうあるべきか？」



第5回科学隣接領域研究会について

日時：2017年8月28日（月）10：00～13：30

場所：日本科学協会会議室（東京都港区赤坂1-2-2 5F）

参加者（敬称略）

科学隣接領域研究会	リーダー	金子 務（大阪府立大学 名誉教授）
	サブリーダー	酒井 邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
	メンバー	前野 隆司（慶應義塾大学大学院 SDM 研究科 委員長・教授）
	〃	安藤 礼二（多摩美術大学美術学部 教授）
	〃	植木 雅俊（NHK 文化センター 講師）
	〃	岡本 拓司（東京大学大学院総合文化研究科 准教授）
	〃	正木 晃（慶應義塾大学文学部 非常勤講師）
特別講師	〃	廣野 喜幸（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
	〃	鈴木 邦彦（米国ノースカロライナ大学医学部 名誉教授 他）
事務局	会長	大島 美恵子
	常務理事	中村 健治
	業務部マネージャー	石倉 康弘
	〃 スタッフ	豊田 悠也、堀籠 美枝子

資 料

- ・鈴木邦彦先生資料 「似非科学と社会倫理」プレゼンテーション資料等
- ・前野隆司先生資料 「ロボエシックス（ロボット倫理）人と機械はどうあるべきか？」プレゼンテーション資料
- ・事務局資料 日本科学協会主催セミナー「木魂する科学とところ」実施報告書

内 容

- ◆大島会長のご挨拶
- ◆金子先生のご説明

特別講師としてお呼びした、鈴木邦彦先生は金子先生の東京大学教養学部教養学科科学哲学分科の先輩です。鈴木先生は、アメリカで脳神経生化学者（臨床と基礎）として医学研究を中心に進められ、日本に戻ってからは日本学士院の会員として活躍されたそうです。本研究会では鈴木先生に、医学研究者から見た倫理の問題などざっくばらんに話してほしいと願われ、研究会はスタートしました。

- ◆鈴木邦彦先生のご講義 「似非科学と社会倫理」と質疑応答

似非科学とは、「科学」という権威の物陰に隠れて「科学」の目には疑問に思われることを社会に向かって発信することであり（例えば、イモリの黒焼き、マイアスイオンを発生する空気清浄機、ヒアルロン酸、グルサミコ酸、血液型での性格診断、髪の毛で被曝がわかる機械など）、すべてが意識的な詐欺ではなく、本人も信じている場合が少なくないそうです。また似非科学の多くは、マスコミが容認、宣伝することによって成立しており、私たちは物事を論理的に考える習慣が必要で、基礎的な科学教育が重要であるとお話されました。またサイエンス周辺の倫理問題に触れながら、儲けがすべての資本主義や権威に流されず「健康な懐疑心」を持ち、自分自身の思考を停止しないことが重要とお話されました。

終了後、研究者メンバーそれぞれの専門分野から、講義の内容について活発な質疑応答や議論がありました。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

◆前野隆司先生のご講義「ロボエシックス（ロボット倫理）人と機械はどうあるべきか？」と質疑応答

まず倫理学とは、「どうあるべきか」という学問であると位置づけを確認し、カントの義務主義とベンサム、ミルの功利主義から「殺人」について考えたときの例を挙げられ、「倫理学の答えは出ないけれども一つの軸になる（マイケル・サンデルの議論）」という話をされました。

ご講義のテーマについて、ロボットと幸福学の研究者の視点で、大学で講義されている科学技術倫理の話を交えながら、自動運転の問題、ロボットに心を作るか、AI 倫理とシンギュラリティ問題、アイザック・アシモフのロボット工学三原則、サイボーグはどこまで許されるか、人間の倫理、自由意志についてなど問題提起されました。

また、ロボット倫理は、我々はいかに生きるべきかという「人間の倫理」と、技術はどうあるべきかという「自動機械の倫理」が重なってくる問題であり、答えがない問題が多く、技術者倫理教育では、そのような答えのない問題に対して一面的に答えるのではなく、多面的な答えがあり得るということをよく理解して、判断する力を育てていくというお話を伺いました。

終了後、研究者メンバーそれぞれの専門分野から、講義の内容について活発な質疑応答や議論がありました。

◆事務局からの連絡

7/2 開催「木魂する科学とこころ」講演会の実施報告

以上